

[成果情報名] つるありインゲンの抑制栽培

[要約] つるありインゲンを秋期に収穫するための播種適期は8月上旬～中旬で、9月下旬～10月末に収穫することができる。整枝管理として、摘葉作業を収穫開始期頃に2回行うと、収量を落とすことなく作業性を向上させる。

[担当] 山梨県総合農業技術センター・栽培部・野菜科・赤池一彦

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 中北普及センター他

[背景・ねらい]

複合経営の補完品目として、栽培が容易で省力的なつるありインゲンに着目し、ナスなど夏秋野菜の収穫量が減少し、労力に余裕が出てくる秋期に生産出荷することを目標とした。

そこで、つるありインゲンを10月期を中心に効率的に生産するための播種適期や整枝法について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 平坦地で、つるありインゲンを秋期に収穫するための播種適期は8月上旬～中旬であり、9月下旬～10月末の降霜時まで収穫することができる(表1)。
2. 支柱上部に達した親づる先端部は摘心の有無に関わらず、子づるや孫づるは旺盛に伸長し上物収量や上物率に影響しない(図1)。
3. 収穫開始期頃に、繁茂した本葉を全体の10～15%を2回に分けて摘葉することで、収穫時に莢が見つけやすくなり作業性が高まる。摘葉を行っても上物収量や上物率は減少しない(図2、表2)。

[成果の活用上の留意点]

1. 本試験に用いた品種は「モロッコ」である。播種は3粒の直播とし、最終的に1株に間引く。栽植密度は畦幅200cm(床幅80cm、通路120cm)、株間40cmの1,250株/10a植えとする。肥料はCDUなどを用い、3要素成分が各15kg/10a程度となるよう施用する。
2. 植床は8月の生育初期に地温の上昇を抑えるために白黒ダブルマルチを用いる。また、9月の長雨や台風に備え、やや高畦とする。
3. インゲン栽培には、キュウリ・インゲン支柱にネットを被覆した支柱栽培の他、ブドウ棚などに垂直ネットを掛けた棚栽培も可能で、この場合親づるの摘心は不要である。
4. インゲンの本葉は、小葉3枚と葉柄で構成されているため、葉柄の付け根部位に手をあてることで容易に摘葉作業ができる。

[期待される効果]

1. 補完品目の一つとして、省力栽培が可能なつるありインゲンを基幹品目の端境期となる10月期に生産出荷できることで、複合経営の一助となる。

[具体的データ]

表1 つるありインゲンを10月期を中心に生産出荷するための播種適期(2010~2012年)

年次	播種期 (月/日)	収穫期 (月/日)	上物収量 (kg/10)	上物率 (%)	生育 結莢	気象
2010年	7/27	10/4~11/1	1,155	72.2	落花多	9月 猛暑
	8/6	10/4~11/1	1,774	89.6	" 少	
	8/17	10/4~11/1	1,434	90.4	" 少	
2011年	7/26	9/13~11/11	520	70.2	落葉多	9月 多雨 (台風)
	8/5	9/20~11/11	510	77.9	" 多	
	8/16	9/30~11/11	677	81.9	" 多	
2012年	7/26	9/12~10/31	2,591	88.6	落花無	9月 少雨
	8/6	9/21~10/31	2,049	87.7	" 無	
	8/16	9/28~10/31	1,775	86.0	" 無	

いずれの年次とも、整枝法は親づる摘心あり、摘葉なし。

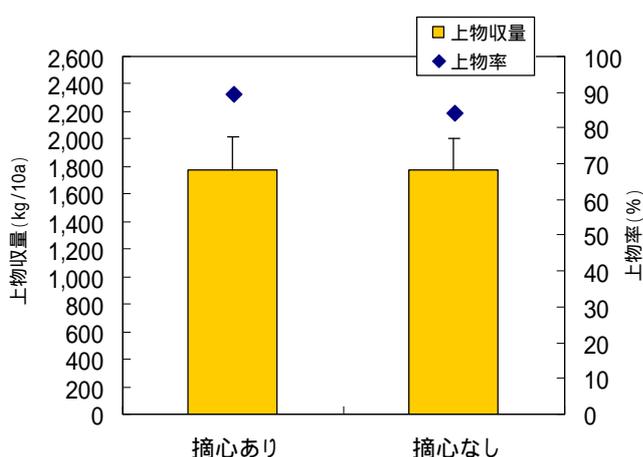


図1 親づる摘心の有無の違いによる上物収量および上物率(2010年)
いずれも8/6播種。垂直線は標準誤差。

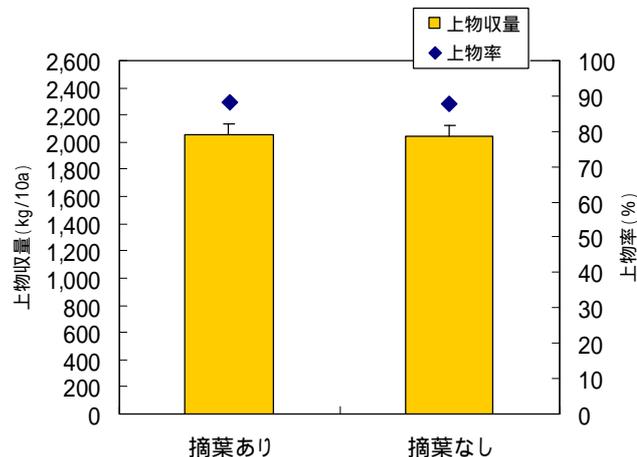


図2 摘葉の有無の違いによる上物収量および上物率(2012年)
いずれも8/6播種。垂直線は標準誤差。

表2 摘葉の有無の違いによる1株当たりの作業時間および莢の視認性(2012年)

整枝法	摘葉回数 (1株当たり)	総摘葉時間 (1株当たり)	総収穫時間 (1株当たり)	莢の視認性 (収穫時)
摘葉あり	2回	2分28秒	16分42秒	
摘葉なし	-	-	21分36秒	~ x

いずれも8/6播種。摘葉作業は9/24、10/2に実施。莢の視認性：良好、やや良好、やや不良、x不良。

[その他]

研究課題名：平坦地における冬期を中心とした省力品目の作期拡大技術の確立
 予算区分：県単
 研究期間：2011~2013年度
 研究担当者：赤池一彦、中村知聖、小澤明子